



話題の本棚

高田大介著『記憶の対位法』

K. J. ドーヴァー著、中務哲郎、下田立行訳『新版 古代ギリシアの同性愛』

特集／文学の土地 —— 日本編 ——

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



univ.
CO-OP

京大生協
綴葉編集委員会

物語はフーガを奏でる——『図書館の魔女』作者による最新長篇

記憶の対位法

高田大介著
東京創元社



二〇一七年、フランスの地方都市リモージュ。新聞記者のジャンゴが祖父の遺品から発見したのは、二十あまり積まれた黒檀の小箱と、そのなかに入っていたはらばらの紙片だった。戦後、対独協力者と噂され、隠遁生活を送っていた祖父。彼は晩年、どんな思いでこれらの小箱を集めたのか。古典学を専攻する大学院生・ゾエと共に、ジャンゴの探究が始まる。

——という出版社公式のあらすじは、しかし、本作のすべてを明かしてはいない。亡き祖父の遺品をめぐる探究は、たしかに本書の根幹をなしているけれども、やがて物語は幾つかの枝葉に分岐する。小箱から見つかった紙片は、ヨーロッパの音楽史にとって重要な発見であり、祖父を巡る謎はいったんわきに置かれて、キリスト教と音楽についての学術的な語らいに紙幅が割かれる。また一方で、本書は現代フランスの問題——相次ぐテロへの不安によって高まる排外主義にも眼を向ける。ジャンゴの友人も逮捕されるなかで、ムスリムに対する差別といかにして向き合うべきか、議論が深められてゆく。実のところ、祖父の謎へと戻ってゆくのは終盤も終盤である。しかも、その謎が解かれることはない。推理小説のよつに、たったひとつの「真実」が本書で明かされることはないのだ。

けれどもそのような構成には、探究についての本書のスタンスがよく表れている。つまり学問は、ひとつの答えが与えられるものではないのだということ。そうではなく、世界は、歴史は、探究のプロセスと不可分に現れながら、それぞれの思いを通じて変奏されてゆく。そこからポリフォニックに「いま」が編み上げられる様を、ゾエはこう諭える——『対位法みたいなもんだよ』。

忘れられないこと。忘れてはいけないこと。それを繰り返して出し続けること。記憶。歴史。それは思い出されるたびに少しずつ変質していくのかもしれない。その意味すらが書き変わっていくのかもしれない。ただ、記憶は何度でも呼び出され、その度にいつでも、いまもなお、常に既にそこにある。

そんな「記憶の対位法」を成立させるものこそ、時代を超え、国籍や文化をも超える共感である。初めこそホームズよろしくの推理が繰り出された本書が、やがてその探究を二人の推理ではなく他者との協力によって成し遂げる展開——一連の探究でジャンゴは友人を増やし、世界を広げてゆく——を見せることから、本書の祈りは明らかだろう。すなわち、裏切り者として疑うよりも、他者を信じ、その手を取ることを。人を、世界のことを知り、手を伸ばすこと。本書が連載された二〇一三年、フランスは暴動に揺れていた。作中で懸念された分断はいっそう深刻の度を増している。いっそ素朴なまでの本書の祈りは、ゆえに切々と読まれ得るはずだ。(水炊き)

(四三六頁 税込二四二〇円 4月刊)

古代ギリシアの同性愛——ノモスとエロスの交差するところ——

新版

古代ギリシアの同性愛

K. J. ドーヴァー 著

中務哲郎、下田立行 訳

ちくま学芸文庫



冒頭の図版をめぐる。そこには壺絵に描かれた、あからさまに性的な図柄の数々が並ぶ。古代ギリシアにおいて、同性愛（ここでは主に男性同士のそれである）そのものは決してタブーではなかった。しかしその一方で、男性が男性に対して売春を行うことは、戦場からの逃亡、兵役の拒否、両親の虐待といったものと並び市民の権利の剥奪を伴うものでもあった。それでは一体、同性愛はどのような面で許容され、どのような面で制限されていたのか？

ドーヴァーがまず着目するのは裁判記録である。アイスキネス『ティマルコス弾劾』においてティマルコスは、若かりし頃に売春を行っていたという理由で、市民権を剥奪されるべきだと告発される。告発者のアイスキネスは、陪審員たちに彼がそうした行為を行っている人物であることを認めさせようとする（古代の裁判においては、現代のそれと比べて客観的証拠のみならず陪審員の主観にいかにか訴えかけるか、ということも重要であった）。そこには当時のアテナイ人たちの価値観——どのような行いが恥すべきものであり、どのような行いがそうでないのか——といったことが描かれている。ドーヴァーは裁判記録から同うこののできる価値観を、性急な結論に飛びつくことなく丁寧に論じていく。

壺絵や詩作も、古代ギリシアにおける同性愛を紐解く上で重要な手掛かりになりうる。しかしながら、こうした芸術作品を扱う際には注意が必要だ。裁判記録と違って現実そのものよりも文学的なトposや美学的な流行が反映されるため、必ずしも実態を反映しているとは限らない。壺絵に頻出する類の性交が、必ずしも頻繁に行われたわけではない。筆者は読者が畏れかからぬよう案内してくれる。結局のところ、同性愛の可否を決めるのは何だったのだろうか。

鍵となるのは古代ギリシアにおける市民規範である。性交において受け手であることは他者への従属の証であった。特に、金銭を伴う売春はその人物の精神的な墮落を示していることみなされ、簡単に体を許してしまう少年は、欲望に負けやすいということでも非難される。当時のギリシアの市民規範と照らし合わせ、それにそぐわないものは忌避すべきとされた。

重要な指摘をもう一つ。同性愛は農民などの身分の低い階級よりも、身分が高く経済的に裕福な市民の間で行われる傾向にあったという。こうした理由の一つに、裕福な市民階級では女性が外に出る機会（物理的にも、比喩的にも）が少なかったことがあげられる。そこで少年たちが青年の恋の対象となった。同性愛の背後には、家に閉じ込められた女性たちの姿がある。

愛のあるべき姿というのは結局、社会のありようが決定したものに過ぎない。同性愛の諸相を探ると、性規範のみならず当時の市民規範も垣間見ることができると。古代ギリシアの同性愛は、ノモス（規範、慣習）とエロス（性愛）の重なるところにあった。（荒砥）

（五七六頁 税込一九八〇円 3月刊）

〈特集〉文学の土地 ——日本編——

2024年4月号（No.426）の特集「文学の土地」では、アメリカ南部、チベット、アフリカの文学作品を取り上げました。海外文学を読めば、教科書には書かれな

いその土地の日差しの温度、風の音色、街角の人々の息遣いが臉の裏に宿ります。そして今月の特集は「文学の土地——日本編——」。日本の文学作品もまた、それぞれの土地の歴史や人の繋がりのなかで紡がれてきました。それでは文庫本を携えて、俳句、小説、詩歌をめぐる綴葉の小旅行のはじまりです。（浅煎り）



先人の跡を訪ねて——俳都・松山

愛媛・松山は歩けば句碑にあたる俳句のまち。目の前の景色に刻まれた十七音を重ねれば、たちどころに俳人たちの視界が現れる。いかにしてこの俳都は生まれたのか？ 先人の足跡を追って、まずは近代日本の幕開け、明治初期まで旅してみよう。

■近代俳句の出発点——子規と漱石

「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」——言わずと知れた夏目漱石の名作『坊っちゃん』（新潮文庫）。漱石が松山中学で教鞭を執っていたころの体験を下敷きに書かれたこの物語の裏に、日本近代文学の礎を築いた二人の文学者の友情がある。



漱石が松山に赴任したのは一八九五年。時を同じくして、第一高等中学校の同級生であり、漱石を「畏友」と呼ぶ正岡子規も、結核の療養のため帰郷。東京で芽生えた友情は、松山の地で再び交錯する。漱石の下宿「愚陀仏庵」に身を寄せた子規はここで日夜句会を開き、小説家としてデビュー前の漱石も手ほどきを受けた。漱石はこのころの生活を、彼

特有のユーモアたっぷりに振り返っている。

「僕は二階に居る、大將は下に居る。其うち松山中の俳句を遣る門下生が集まって来る。僕が学校から帰って見ると、毎日のように多勢来て居る。僕は本を読む事もどうすることも出来ん。尤も当時はあまり本を読む方でも無かったが、兎に角自分の時間というものが無いのだから、止むを得ず俳句を作った。」

小森陽一『子規と漱石 友情が育んだ写実の近代』（集英社新書）は、子規が漱石と議論を戦わせながら俳句観を形作っていく過程を克明に辿る。病魔を振り払い、俳句を革新し、文学者として名を立てようとする子規の気焰。そこには松山藩士族としての生まれが少なからず関わっている。四国随一の親藩として栄えた城下町は、明治維新の動乱で朝敵として不遇な扱いを受けた。その汚名を雪ぐために子規は短い生涯を駆けたのだ。



松山や秋より高き天守閣

子規

時代が変わってもなお白く輝き続ける松山城

は、故郷を愛する人々の誇りだっただろう。

■流浪の旅の終着点——種田山頭火

子規が眺めた城山を、こんなふうに詠んだ俳人がいる。

秋空はつきりお城は白く

山頭火

種田山頭火は一八八二年、山口県に生まれた。宿痾の酒から逃れるように仏門に入り、托鉢と句作の旅を始める。そんな彼が安住の地を求めて「ひよいと四国へ」やってきたのは、遍路だとか、同じ『層雲』の俳人・野村朱鱗洞の墓参りだとか言われているが、私には子規一門の築いた俳都の磁場が感じられてならない。子規の没後、後継を託された高浜虚子に対し、兄弟子・河東碧梧桐は型破りな新傾向俳句を唱えた。山頭火は後者の流れを汲んだ自由律の俳人・荻原井泉水の弟子。子規が芽吹かせた近代俳句は、弟子たちの手で豊かに枝葉を広げ、山頭火まで連なる。

『山頭火と松山 終焉の地、松山における山頭火と人々』（アトラス出版）を繙くと、彼が道後温泉近くの一草庵で句作に励み、松山の人々に温かくもてなされた様子がよくわかる。



ずんぶり湯の中の顔と顔笑ふ

山頭火

山頭火の念願は二つ。「ほんたうの自分の句を作りあげること」、そして「つり往生」。彼の見た景色は、今の私たちの目にはこのように映るだろうか。

おちついて死なさうな草萌ゆる

山頭火

誰か故郷を想はざる——北国の作家たち

近代の熱い風のなかで生まれた文学もあれば、その陰から芽吹く文学もある。次は北国の作家たちの足跡を追ってみたい。

■太宰と修司——津軽の文豪たち

例えば太宰治。その類稀な才能と放埒な人生は、今もなお人々から愛され続けている。さて、前期の『晩年』に後期の『斜陽』『人間失格』と無頼で破滅的な顔ばかりが取り上げられる太宰だが、井伏鱒二の仲介で結婚をした中期には私生活も安定し、芸術性が存分に発揮された秀作を次々と世に放った（『富嶽百景』『女生徒』『走れメロス』など）。

そのひとつが『津軽』（新潮社）である。「津軽の事を書いてみないか、と或る出版社

俳句を愛し、俳句に愛された土地・松山。江戸の歴史と文化を受け継ぎ、それを乗り越えた子規の手で、城下町は俳都として蘇った。各地に残る句碑がその証拠だ。先人を訪ねてその土地を踏み、旅人はそこで新たな言葉を残す——松山の文学と土地は映じ合い、次の十七音を待っている。

（くたくた）

の親しい編集者に前から言われていたし、私も生きているうちに、いちど、自分の



生れた地方の隅々まで見て置きたくて、或る年の春、乞食のような姿で東京を出発した。曰く「昭和の津軽風土記」——太宰の流麗な筆致がよく表れた故郷再訪の紀行文だ。

ただ、彼はそこにある私的な目的を課す。

「私には、また別の専門科目があるのだ。世人は仮りにその科目を愛と呼んでいる。人の心と人の心の触れ合いを研究する科目である。私はこのたびの旅行に於いて、主としてこの一科目を追求した」。社会主義の吹き荒れる時代、津軽の豪農の六男として生を享けた彼の

生い立ちは自己否定という宿命を深く縁取るものだった。そして本作のクライマックスは彼にとつての育ての親とも言える乳母・たけとの再会——故郷への屈折した眼差しを愛と嘯くこの場面に、私は太宰の誠実さをみたい。そして『津軽』が刊行される幾年か前、弘前では寺山修司が産声を上げていた。詩人、小説家、劇作家、批評家。有り余る才は自由で、その必然のように孤独を纏う人だったように思う。その全貌を捉えることは難しいけれど、彼の初期に詠んだ歌には

ふるさとの訛りなくせし友といて

モカ珈琲はかくまでがし

吸ひさしの煙草で北を指す時の

北暗ければ望郷ならず

とある。「望郷の歌をうたうことができるのは、故郷を捨てた者だけである」(『家出のすめ』)と語った彼の目は、どのような表情を湛えていたのだろう。中央から逃げき本州の北端。それは自己意識を映し出す鏡であり、文学を生み出す遠心力を帯びた土地であったのかもしれない。

■宮沢賢治——イーハトーブのうた

故郷の遠心力に徹底的に対峙した彼らに対

して、ひたすらに土地の求心性に己を浸透させ、作品を純化せしめた作家の姿もある。

時は遡ること一八九六年、岩手は花巻で生まれた宮沢賢治は、花巻農学校の教諭でもあった。「雨ニモマケズ」——農民を取り巻く悲惨な現実を眼前にした賢治の祈りは、「イーハトーブ」という心象世界に結実する(童話集『注文の多い料理店』や『グスコーブドリの伝記』など)。

そして名作『銀河鉄道の夜』(新潮社)の最も美しい一節。「川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまっ赤な火が燃やされ



その黒いけむりは高く枯梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりリチウムよりもうつくしく酔ったようになってその火は燃えているのです。」「童話的な韻律に導かれた天上の色彩に、読者はただ息を呑むことしかできない。この物語の終盤、ジョバンニとカムパネルラは命と引き換えに「みんなのほんとうのさいわい」を願う。その優しい光は、イーハトーブのうたとして現在を生きる私たちにも届くはずだ。

遙けき土地で育まれた愛、望郷、祈り。それは土地の個性を超えた普遍性をも獲得しているように私は思う。さて、随分と遠くまで来てしまったが、中央の水脈から離れて紡がれた文学の豊かさはまだ尽きない。次は関西の海の玄関口に足を伸ばそう。(浅煎り)

一九二〇年代・神戸モダンニズム——詩と詩人

海港都市・神戸。そこは中央から遠く離れた土地。しかし二〇世紀初頭、日本を席巻したモダンニズム詩の中心地はどこかと問われたら、私はあえて神戸を挙げたい。そこはモダンニズム詩のもうひとつの首都だった。

一九二〇年代の神戸では、関西学院大学の

学生を中心として、後に「神戸モダンニズム」と呼ばれることになる文学思潮が俄に活気を帯び始めた。『関西文学』『想苑』『横顔』『羅針』『木曜』『文芸直線』と



いった優れた同人誌が立て続けに創刊されたこの時期は、大橋毅彦著『神戸文芸文化の航路』（琥珀書房）の言葉を借りれば「関西学院文学連峰」の姿が立ち現れた時代」だった。海港都市という性質上、神戸には、未来派やタタ、コミニズムやアナキズム、表現主義や構成主義など、二〇世紀初頭の西洋を席卷したアヴァンギャルド芸術が一気に流れ込み、刺激に飢えた若者たちはそれを一心不乱に吸収した。そうして誕生したのが、一般に「神戸モダンイズム」と呼ばれる尖鋭的な文学運動である。神戸モダンイズムは普通、稲垣足穂や竹中郁といった有名詩人によって代表されるが、ここでは彼らふたりの背後で忘れ去られようとしている無数のモダンイズム詩人の存在に焦点を当てたい。

まずは神戸のモダンイズム詩がいかなるものだったのかを示すために、稲垣足穂や竹中郁以外のモダンイズム詩人にも光を当てたアンソロジーである季村敏夫・高木彬編『一九二〇年代モダンイズム詩集』（思潮社）から詩を引用しておこう。たとえば近藤正治の「A氏の自己紹介に」の冒頭五行はどうかだろうか。

煙と騒音と塵埃の虹の中で
ぼやけたキュビズムの尖角が
私の第三肋骨をついてくる

私の心臓はつぶれ
づるけた舌の先に毛が生えてしまった

あるいは稲垣足穂の盟友であったが今ではあまりその名を見かけることのない衣巻倉三の詩はどうだろうか。衣巻の作品集である山本善行編『街のスタイル』（国書刊行会）から「毀れた街」という題の詩を全文引用しよう。そこには近藤の詩と同じく、当時から百年ほど経った今でも、清新な言語感覚を見て取ることができるだろう。

崩れた階段を薔薇が一輪おりてゆく
蜥蜴めが アスファルトの輝にのがれた

港の街のまひるとき
ボートと汽笛がなる

そして以上で見えてきた神戸モダンイズムの深層に迫ろうとしたのが、先のアンソロジーの編者でもある季村敏夫による二冊『山上の蜘蛛』と

『窓の微風』（みずのわ出版）である。季村は言う。「一九二〇年代の神戸の文学思潮とい



えば、たちどころに竹中郁や稲垣足穂があがるところが、彼等の背後の水脈を意識した論考に出遭うことはそれほど多くはない」。

そこで季村は「地域性」と「無名性」を軸に、この未開拓の水脈を辿ろうとする。当時の同人誌を収集することで、忘却の淵に沈み込もうとする詩人たちを甦らせること、そこに季村のひとつ一つの目的がある。「戦前の神戸の雑誌（…）を手にしたとき、ある感慨が突き上げてくる。今ではほとんど顧みられることのない詩人、同人誌活動に参加していてもほとんど書くことなく消えていった面影が、雑誌の背後から現れてくるからだ」。

だが問題は、震災や空襲、国家権力による押収処分等を通じて、当時の同人詩の大半が失われているということである。その消失は取り返しがつかない。しかしだからこそ、わずかに残った同人誌を収集すること、あるいはここで紹介したいいくつかの本を通じて当時の作品に触れることは大きな意義を持つ。神戸モダンイズムの詩人たちを忘却の淵に追いやらないためにも、当時から百年の時が経過した今、その詩を改めて読み返したい。

*

俳句であれ小説であれ詩であれ、文学は土地と結びつく。そしてその土地でしか生まれ得ないものにこそ文学の力は宿る。（ばや）

新刊コーナー

月とコーヒー デミタス

吉田篤弘著
徳間書店



こんな筆名ですから、タイトルに「コーヒー」とあるとそれだけで書架に手を伸ばしてしまいます。するとあとがきにはこんな言葉が――

「おそらく、この星で生きていくために必要なのは「月とコーヒー」ではなく「太陽とパン」の方なのでしょうが、この世から月とコーヒーがなくなってしまうたら、なんと味気なくつまらないでしょう。」

気づけば私はレジを通っていました。最近太陽とパンをささえるのにもどうにも忙しくて、気が滅入っていたところでしたから。可愛らしい表紙のこの本は、そんな日々のなかでもふっと息をつけるような、ささやかな短編集となっています。一見とりとめもなく浮遊する幻想の世界。そこに登場する面々といえは駄目なロボット・オーケストラ、自分のことがわからないスフィンクス、地球儀を

探す男、物書きのゴオスト、空を飛べない万物調達屋……ここから一体どんな物語が始まるのでしょうか。「小さなカッパ」サイズのストーリーをどうぞご賞味あれ。

ちなみにそれぞれの物語にはコーヒーが隠し味のように散りばめられているのですが、それは伏線にもミステリの種になることもありません。ただ一息つかせるという使命を全うするために、コーヒーはそこで芳しい湯気を湛えているのです。おっと、ちょっと余白が足りなくなってきました。続きはコーヒーでも淹れてからにしましょうか。(浅煎り)

(三三六頁 税込二〇九〇円 3月刊)

一心同体だった

山内マリコ著
集英社文庫



平成の初めに二〇歳だった女の子が四〇歳になる令和の初めまで、異なる人物

に焦点を当てた八編の短編が輪舞形式で綴られる。平成三〇年史を背景に女性たちの友情を描いた本作には多くの共感が寄せられる。分かなあと思うのが学校生活での一場面。

二人組を作れと言われたときのあの緊迫感。誰かに声をかけるのも、それを待つのも、そして別の友達の視線を感じつつそれを受諾するのも、どうやっても誰かが傷つく気がして(悪者になりたくなくて、ともいう)身動きがとれなかった。だから女は嫌なんだって? そんなことは絶対にならないと断言したい。

身に覚えのある描写が続く本作だが、時折この感覚は知らないなと思うところがある。これこそ私たちが本書を読むべき理由だ。

例えば結婚式で独身女性だからというだけで見知らぬ新郎友人席への酌を要求されるのか。友人に先を越されたことを僻んでいるように扱われるとか。想像はできるが実体験として味わったことはない。

「女性たちはリレーをしてる。自分の代でなにかをほんのちょっと良くする。変える。打破する。前進させる。そうやって、次の世代にバトンをつなぐ」。このリレーのおかげだ。私が知らないでいられたのは盾となってくれた女性たちがいたからだ。

物語は終に最初の主人公へとつながる。苦い思い出としても、人生のうちの短い期間だったとしても、同じ時代を生きる私たちは連帯する。次の走者にバトンを渡すまで共に走る私たちは友達になれる。(ひるね)

(四〇〇頁 税込九九〇円 4月刊)

軽いめまい

金井美恵子著
講談社文芸文庫

特に何かが起るわけではない。描かれるのは、主婦の夏実（とその夫と子供）の生活、ただそれだけ。日常、と意識すらしないくらいの日常が描かれ、そこには時々、事件未満の、狂気未満未満の、軽いめまいが訪れる。例えば今はもういない人を、気取られることなく撮った（しかし誰が？）写真を眺めるとき、奇妙な感覚のような。しかし、はっきりと名指す事ができるならばもうそれは「軽い」めまいではなくなってしまう。私たちには（幸運なことにも）ただ読み進め、体験することしかできない。

こうして文体が問題になる。金井美恵子に固有の文体は、その一見長すぎるとも思える一文に、会話も描写も全て飲み込んで、途切れることなく流れてゆく。作中で何度か描かれる蛇口からの水の流れはこの文体の動きそのものでもある。つまり、文章はその内容を自らでも演じているのだ、ともいえよう。いや、内容が文章を演じているのか。とすると、

文体は思考の装置である、ということにもなる。

このさほど長くない小説を読み終えて、心の声が金井美恵子の文体になっていることに気づいて驚く時、見えてくる世界が金井美恵子色に染まりつつあることも同時に驚いていることだろう。つまり私たちは新しい思考の装置を手に入れているのだ。

軽いめまいが、私たちの日常に姿を現しはじめる。夏実の、《そういうことって、ない？》という問いかけに、私たちは深そうなずく。

（二五六頁 税込三三〇円 1月刊）

面白すぎて時間を忘れる
「毒」の世界田中真知著 鈴木勲監
三笠書房

毒って何だろう。

体に悪いもの？ 食

べたら死ぬもの？

「何ミミグラムで何

万人が死ぬ」なんていうフレーズも耳にするかもしれない。なんとなく怖いイメージはあるが、それゆえに何とも言い難い魅力を感じる。そんな毒の世界を少し覗いてみよう。

ドラマや小説で頻繁に殺害に使われる青酸カリ。工業用や医療用に広く使われており、我々の生活に欠かせない一方で、毒性の強さや、入手が比較的容易であることから実際に多くの犯罪に使われてきた。大量の青酸カリが胃に入ると青酸ガスが発生するのだが、これは細胞が酸素を使ってエネルギーを生み出すのを阻害する。つまり細胞が呼吸できなくなってしまうのだ。致死量を摂ると数分で死ぬという凄まじい即効性を持つ。

サリンも誰しもが聞いたことがあるだろう。三十年ほど前に数千人の死傷者を出したテロで使われた毒であるこのサリンは、神経からの信号をオフにする機能を阻害する。その結果筋肉がずっと動き続けてしまい、痙攣や呼吸困難を引き起こし、死に至るという仕組みだ。毒ガスのイメージが強いが、厄介なことに皮膚からも吸収され毒性を発揮する。

こんなふうに、毒というのは毒性・強さ・作用機序など実に多様だ。確かに恐ろしいものではあるが、その仕組みなどについては興味を持った方も多いのではないだろうか。だが一人でそれを学ぼうと思えば大変な労力をかけることになる。しかし本書なら専門知識は必要ない。さあ、あなたもこの一冊から毒の世界を始めてみよう。

（二九八頁 税込八九一円 3月刊）

（竹輪）

アメリカン・マスターピース 戦後篇

柴田元幸編
スイッチ・パブリッシング

一九五〇年代前後
はアメリカ短篇小説
の黄金時代とされる。
発表媒体が充実し、
実力ある多くの作家がそこで腕を振るった。
本書は、そんな時代の精華を名翻訳者・柴田
元幸自ら選んで訳した一冊だ。



ただし黄金時代といっても、輝かしい小説
というイメージを持ってページを開くと、そ
の印象は裏切られるはずだ。むしろ暗鬱とし
た闇——社会の暴力や傷を描いた作品が本書
には目立つ。たとえば巻頭に据えられている
のは、或る村の残酷な催しをあくまでも爾々
と書き、忘れがたく厭な印象を残すシャーリ
イ・ジャクソンの小品「くじ」だ。その後も
戦争のトラウマとその理解しがたさ——とい
う図式化させ拒む不条理——を鮮烈に書いた
サリンジャー「バナナフィッシュ」や和「家
族旅行を襲った暴力の、救いたい理不尽さ
にかえって世界の真理を垣間見るようなオコ
ナー」「善人はなかなかいない」などが続く。
いずれも鋭い短刀の切れ味。笑える馬鹿話で

あるディック「プリザビング・マシン」にさ
え、「闇の時代」という言葉が出てくる。曰
く「この世界には《ひびが現在生じてつつある》
けれどそんな世界の亀裂を語りながらも
ボールドウィン」「サニーのブルース」はそれ
に対抗する音楽の力を歌い上げる。《破滅し
崩壊し、狂い、死ぬ危険を賭して新しいやり
方を探し、私たちに聴かせようとしている。
（…）こうして広がる闇のなか、これだけが
唯一私たちにある光なのだ》。悲惨な物語た
ちの中にあって沁み入る、音楽小説の、黒人
小説の、アメリカ文学の、傑作だ。（水炊き）
（二五六頁 税込二九七〇円 12月刊）

翻訳する私

ジュンバ・ラヒリ著
小川高義訳
新潮社



ロンドン生まれ、
アメリカ育ち。ベン
ガル人の両親の元に
生まれたインド系ア
メリカ人のラヒリは、幼いころから英語とペ
ンガル語を反復横跳びして生きてきた。そんな
著者の生き様は、まさに「我訳す。ゆえに
我あり」という言葉に尽きる。

イタリア語で小説を書いた後、大学教授と
なり翻訳に改めて魅せられた著者は、様々な
疑問を持ち、自分なりに納得できる落としど
ころを導いてきた。文学とは何か。翻訳とは
どのような行為であるのか。詩情を失わずに
どのように翻訳できるのか。一つの語につい
てどれだけ深く考えてきたのか。辞書を引く
ということとはどのような行為なのか。多方面
にわたるラヒリの豊富な知識を用いて考えら
れた思考回路が例示されている。

もちろん、本書の内容は学問的な話だけに
限定されているわけではない。彼女のライフ
ストーリーもまた、当時翻訳していた本と掛
け合わせながら情緒豊かに紡がれる。特にオ
ウィディウスの『変身物語』を引用しながら
描かれる母の死への向き合い方は、悲愴感を
孕みながらも美しさすら感じられる。

評者は文学や表現に疎く、言葉はコミュニ
ケーション・ツールの一つとしか捉えていな
かった。しかし、本書を読んだから言葉に対
する意識が変わった。本書で示されているよ
うな、著者の意図を組みながら言葉を組み立
てていく翻訳作業の緻密さと閑麗さには、心
奪われるものがあつた。翻訳、ひいては言葉
に対する意識すら変えてくれる一冊となるの
ではないだろうか。

（フランチ）
（一九二頁 税込二二四五円 4月刊）

文学者とは何か

安部公房／三島由紀夫／

大江健三郎著
中央公論新社



文学者とは何か、とは大きく出た。しかしそれを支えるに足る説得力を持つ顔ぶれが並ぶ。本書は、戦後日本文学を代表する三人による鼎談・対談集である。

冒頭を飾るのは鼎談「文学者とは」。デビューしての大江はまだ東大に籍をおく二十三歳。新進気鋭の作家を、一〇ほど歳の離れた先輩たちがときにやさしく、ときにかからかい混じりに導くという構図だ。その後は解説で「総当たり戦」と呼ばれる対談が続く。三者三様の個性はときに真つ向から反発するが、議論は喧嘩腰にも平行線にもならない。独立独歩を保ちつつも、文学者としてお互いを認め合っている三人ならではの距離感だ。

批評家について語る段で、三島はこう述べる。「自分の作品が大理石になり、それがすばらしいのみさばきでどんどん彫刻されてゆくような、そういう批評にぶつかると、よこごびを感じる」。仮にも書評を書く人間の端くれとして心に刻みたいが、このような評を

展開するには本書はスケールが大きすぎる、というと言ひ訳がましいだろうか。論じられるテーマも多岐にわたる。文学の政治的意義、短編と長編、セックスの問題、そして世界文学まで。鮮やかにかわされる議論の応酬は残像を追うのもやっとだが、不思議な求心力を持っている。もっと知りたい、理解したい。何が彼らの創作態度を方向づけ、どのように作品に昇華されるのか。幸いにして、議論の中では具体的な作品名がたくさん挙げられている。本書の対談を足場に、三人の文学に手を伸ばすのも悪くない。

(二〇〇頁 税込一六五〇円 12月刊)

文学理論の名著50

大橋洋一／三原芳秋編

平凡社



文学を専攻しよう。そう思った学生の私／あなたは、まず考える。——何を勉強したらいいのだろう。作品を読む、作家について学ぶ、文学史を学ぶ……。だが、「文学」という学問を成立させるような——そしてそれゆえに文学に携わるうえで前提となるよう

な——学ぶべき理論は？ 困った私／あなたは文学理論の本を読む。けれど、どうも釈然としない。私／あなたはこう思う——文学理論はたして今日において意義を持ちうるのだろうか。なぜ文学理論を学ぶのだろうか。

これは文学を専攻する者なら（たぶん）一度は悩まされたことのある、「文学」という学問が抱える本質的な問いだ。「理論の時代」は終わったのか。文学理論はもはや沈むのを待つばかりの泥船なのか。——五〇の名著の解説と共に、本書はこれに否を突きつける。

そこで本書が特に重視するのが現代からの視点だ。この本は、在りし日に花開いた（そして今では輝きを喪った）標本を陳列展示するための本ではない。一九世紀末から二世紀に展開された文学に関する様々な言説が、今日のわれわれにとっていかなる意義を秘めているのか。それを考えるための指南書だ。

とはいっても、もっと気楽に読んだっていい。結局のところ文学理論を学ぶことは、私／あなたの文学との関わり方、その可能性を拓ける出逢いに他ならないのだから。「本書で語られる五〇の著書や論文は、そのどれもが、私たちの文学の読み方を根底から変えた五〇人」に、お目通り願うとしよう。（猫足）

(六〇三頁 税込六九三〇円 3月刊)

アーベドサラーマの人生のある日

パレスチナの物語

ネイサン・スロール著
宇丹貴代実訳 筑摩書房



壁に囲まれた町、パレスチナ・ヨルダン川西岸地区。アーベド・サラーマは、嵐の朝、燃えるバスに駆けつける。息子ミラードがその中にいるかもしれないと知ったときから彼の一日は始まった——そしてこの土地に生きる人びとの物語へとつながっていく。本書はバス事故が起きた二〇一二年の「ある一日」を起点に、パレスチナに生きる人々を描いたノンフィクションである。これは単なる事故の記録ではない。記者スロールは事故に巻き込まれた複数の人物の証言から、彼らの人生を丹念に編み上げていく。例えばアーベドは、初恋や家族とのすれ違い、政治活動、職探しと転居、三度にわたる結婚が丁寧

に綴られる。語られる日常のなかに、人間性を踏みしめる占領の暴力が浮かび上がる。壁と検問が空間を断ち切り、身分証の色が人びとの移動を振り分ける。通行許可ひとつで命運が分かれたれ、男性たちは理由もなく拘束される。そうした分離の構造のもとで、人

の流れと身体が管理される日々が続いている。その暴力のかたちは、声高には語られない。しかし、ひとりひとりの語りや、失われた時間と命の記述のなから、静かに、だが確かに、その痛みが立ちのぼってくるのだ。

それは、かつて起きた悲劇ではない。占領支配が人びとの行動と感情を分断する構造は、いまも変わらず、むしろ強化されている。だからこそ本書は、証言ではなく、警告であり、いまを生きる記録でもある。抑制された語りのなかに奇烈な構造を描ききった、ピューリッツァー賞受賞作。

(三三六頁 税込二六四〇円 1月刊)

(たいやき)

ルワンダのガチャチャ裁判 ジェノサイドの被害者と 加害者の賠償をめぐる対話

片山夏紀著 風響社



一九九〇年、東アフリカの国ルワンダで世界史上稀に見る虐殺が発生した。政

府は、この虐殺による加害者・被害者間の賠償をめぐる裁判を、ガチャチャという、ルワンダの伝統的な寄り合いを利用して推進した。本書は、それがどのようになされているのか

を丹念に記録した研究書である。何より驚かされるのは、調査対象の人々に傾けられた著者の熱意だ。現在のルワンダでは、虐殺の記録・記憶に関する詳細な調査はタブー視されており、賠償に関する裁判記録の閲覧や加害者・被害者への聞き取りは一筋縄ではない。そんな制約の中、著者は裁判記録を手書きで五〇〇ページ書き写し、一年がかりで村に住み込むなど、とにかく手間と時間をかけて虐殺に向き合う。

その根気は本書の成果にも反映されている。章間に配された六つの加害者・被害者間の対話の事例では、およそこの世で起きたとは思えないようなことが次々と語られる。例えば、ある被害者は「一三人の家族と親戚を殺害され、財産も根こそぎ奪われ」ながらも、困窮した加害者の賠償の減額の申し出に応じた。そうした当時の様子を、本人たちがどんなふうに語っているのかも丁寧に描写されている。丹念な調査が生んだ賜物といえよう。

ルワンダの虐殺は、私たちにはどうしても遠い世界の話に思えてしまう。復讐の彼岸ともいえる境涯に立つことを決めたその選択を、私たちはどう受け止めるべきか。安易な答えが用意されているわけではない問いを生き続けることを、本書は示唆している。(倉井)

(四三六頁 税込三三〇〇円 3月刊)

翻訳者の全技術

山形浩生著
星海社新書

山形浩生は、本業の開発コンサルタントの傍ら、経済・政治・SFなどの幅広い一般向け書籍の翻訳を手掛けている。そんな山形の自説があらためて開陳されたのがこの本だ。

その翻訳観はきわめてシンプルだ。読者にわかりやすく翻訳しろ！ 難しい訳語でゲームに巻くな！ ただそれだけである。その明快な訳文の作り方が、自身の経験をもとに語られる。参考になるか否かはさておき、なるほどと膝を打つ点も多い。

それだけではない。あとがきでは、山形をはじめとするアマチュアが置かれた、日本の知識生産の現状が垣間見える。山形は、自身によるケインズやクルーグマンの翻訳が経済学者の論文にまるで引用されないことを嘆く。「そこまで山形をいなかっただことにしたいんですか」。考えさせられる一節である。

日本は翻訳が盛んな国だ。これもう日本語で読めるの？ とよく驚く一方、日本語に翻訳し輸入してからの知識の構築は、私たちに委ねられている。アマチュアがそれをどう見ているか知っておいて損はない。（倉井）

（二〇八頁 税込二四三〇円 2月刊）

貧困とは何か

「健康で文化的な最低限度の生活」という難問
志賀信夫著 ちくま新書

「この国家と社会は人を殺しているし、いまも殺し続けている」——本書に記されたこの言葉は過激に見えるかもしれない。だがそれは誇張ではなく、現実の記述に他ならない。本書が投げかけるのは、「貧困とは何か」という根源的な問いだ。著者は生活保護制度と憲法二三条の乖離に注目し、貧困を「生活の成立が妨げられている状態」と定義し直す。そして、社会的な価値観が「放置しておけない」と判断する状態こそが、その時代・社会における貧困の水準を決めるのである。従来の理論が貧困の「緩和」を目指していたのに対して、著者は一貫して「根絶」を目指し、論を積み重ねていく。膨大な議論を徹底的に分析し、丁寧に解説し、そして正面から批判する著者の姿勢には、脱帽せざるをえない。

利潤を最優先し、人びとの食や住まい、命の重さすら選別する社会に抗して著者は問う——この現実を変えられないのか。その問いかけは決して理想主義ではない。変革は可能だという確かな確信と、静かな闘志から発せられているのだ。（たいやき）

（二六五頁 税込九九〇円 3月刊）

中村屋のボース「新装版」

中島岳志著
白水Uブックス

「愛と革命の物語」——インド独立運動に武力行使も厭わないという姿勢で貢献した、ラース・ビハリー・ボースの生涯。時に本人が残した著書を引用しながら、時代背景やボースがその行動に至った経緯などを第三者目線で記しているのが本書である。

インド独立のためにイギリス総督暗殺計画を企てたボース。計画は失敗し、以降長きに渡りイギリスから監視されることとなる。多くの同志が殺され、インドに居続けることが困難になったため、1915年に日本に亡命する。しかし、日本でも監視の目を免れず、中村屋で匿われることになる。

ボースは中村屋の娘との結婚を経て、日本人としてインド独立を支え続ける。アジア主義者達と協働しながら日本の政治にも影響を与え、中村屋にかの有名な「インドカリー」をもたらす。ボースは偉人ではあるものの、現代の価値観において善人とは言えないだろう。表舞台に立つことないが、歴史に影響を与えた人物の存在を知ることができる、貴重な記録である。（フナチ）

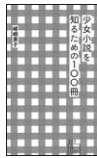
（四〇四頁 税込一八七〇円 3月刊）

真昼にパーティを開こうか 少女小説読書会

書店の棚を眺めたときに息をするように惹かれてしまう本がある。最近だとウェブスター『おちゃめなパーティ』。私がこよなく愛するこの種の物語は、分類するなら「少女小説」になるだろう。広い意味では児童文学に属する一方で、「少女」と冠するこの種の物語は読者を限定してしまっているように思う。いや、読者はきっと幅広くいるのだ、なかなか語り合う相手に出会えないだけで。なぜなら少女小説の読者は、こっそり楽しむ人が多いから。なんせ私たちは、秘密にすることの魅力を知っているし。それになぜだか、少女小説が好きななんて大きな声で言えない気がして。

嵯峨景子『少女小説を知るための100冊』

は好きな本を共有する喜びを思い出させてくれた。本書は、『小公女』や『若草物語』といっ



た少女小説草創期の作品から、今話題の〈築屋のひとりごと〉までカバリーするブックガイド兼少女小説史の概説書。著者が泣く泣く削ったという選り抜かれたラインナップは、定番作品だけでなくのびのびと嬉しいうところ。例えば、イーニッド・フライトン〈おちゃめなふたご〉シリーズ。双子の少女を中心に女子寄宿学校での生活を描いた物語だ。幼少期の私は、この憧れが詰まった物語を繰り返し読んで、作中の真夜中のパーティのことばかり考えていた。だがこのときめきを誰かと共有したことはなかった。だから嬉しかったのだ、本書でこの本の良さを綴る一節に出会えたときは。

もし同じ人がいたら『マイ・ディア 親愛なる物語』を開いてみてほしい。著者はあの〈銀の海 金の大地〉の氷室芽子。「ただ、自分のひっそりとした楽しみのためにだけ、心の奥にしまいこんであ

る親愛なる物語たち。そんな物語をひとつでも持っている人たちと、おしゃべりしたい」と語りかける。少女小説の魅力を紹介する本書だが、何が一番好きかと聞かれたら「食べ物と、ドレス。これに尽きます」と答える著者が綴る最終章は必読だ。あちらこちらの物語の中の食べ物をたっぷりの引用とともに味わえる。

そう、少女小説の生活描写は魅力的なのだ。〈西の善き魔女〉の荻原規子は『もっひとつの空の飛び方』の中でこう指摘している——千年読み継がれる『枕草子』と良質な少女小説、共通するのは女性ならではの日常生活の観察能力である、と。ファンタジーを中心に物語について語る本書は、ここではないどこかの物語に自分と地続きの「ある種の生活実感を獲得する」ことの魅力を伝える。

だがこれは、魅力であると同時に、将来良き家庭人となること、家庭を活動の場とすることを求められた少女たちに向けられた「家庭小説」としての二側面とも思えてしまう。実際、アンは家庭の事情で大学進学を諦めるし、ジョーのお父さんは行儀の良くなった娘の成長を喜ぶのだから。でもあんなに夢中になった小説がそんな窮屈なものだったなんて思いたくない。大丈夫、と強く語るのが斎藤美奈子『挑発する少女小説』だ。おちゃめな少女たちも最終的には保守的で予定調和な結末を迎える？ いや、女だからと見くびるなと古典的名作を読み直すのが本書である。そしてこれはこれまで密やかに楽しまれてきた少女小説を解放する試みともいえる。

さあ共に読み直そうか。私たちはいつも真夜中のパーティに憧れるけど、同じくらい昼間のお茶会だって好きなのだから。(ひるね)



村上春樹の新作を読む——「武蔵境のありく」

新作！——『街とその不確かな壁』で因縁に決着をつけ、このまま収まりの良いフィナーレを飾るのだろうかという凡庸な予想を裏切って現れた新作に、(身勝手に)勇気づけられる。本作「武蔵境のありく」は、去年の『新潮』に載った「夏帆」の続編となる、少し長めの短編だ。これから物語が発展してゆくのだろうか、今この時点でも、目を凝らしてみれば、何かが見えてくる気がする。

前作で不気味な男、佐原と出会った主人公の夏帆だったが、今では平和に暮らしているようだ。そんな折彼女は奇妙な白日夢を見る。ありくいの奥さんが夢に現れ、いきなり武蔵境へ引越せと命じる。なぜなら、自分たちには天敵のジャガーが、そして、夏帆には「大型のモーターサイクルのエンジン音」に象徴される、不吉な何かが迫っているから、とそう言うのだ。そうして引越した先の武蔵境で、彼女はありくい夫妻が住んでいたジャングルで彼らの子供を襲って食べてしまったジャガーと対峙することになる。

今作における「ジャガー」や、前作における佐原が「悪」のアレゴリーであるとするは、この対決は、確かに過去の村上作品の中で繰り返して追求されてきたものと似通って見える。しかしこの連作においては、「悪」の姿はどうにも定まった像を結ばない。「大型モーターサイクルのエンジン音」が明らかに指示しているのは、前作においてツーリングの誘いを夏帆に持ちかける佐原だが、その彼は夏帆の目に「アリクイ」のようだと映っていたからだ。

ここで手掛かりになるように見えるのが本連作における双数性と単数性の対比である。ありくいの世界では、夫妻は「二匹で一体」

のようなものとされる。そして、ジャガーに食べられてしまった子供も二匹。ありくいたちは必ずペアをつくる、と言い切ってもいいだろう。その一方で夏帆は一人っ子であり、前回に続いて今回においても夏帆はそれに思いあたる。加えて言うなら、今作において言及される夏帆の肉親は父と叔父のみであり、彼らと対をなし得る女性たちの影は限りなく薄い。つまり、夏帆の眺める人間世界はありくい世界と違って単数性の「男のいない女/女のいない男たちの——世界なのだ。無論夏帆には母もいるのだが、今の段階では全く登場しないという、この歪み。

この原理を攪乱し、物語世界を駆動しうるのが、「不気味な男」佐原だ。「意外に思うかもしれないが(…)僕らはもともとそう遠くは離れていないんだ」、と前作で夏帆に言い放った彼。ここで佐原は人間の世界に双数性を導入するかのように見える。ここに夏帆が一人っ子であるという情報に置かれた(反復による)強勢を重ね合わせると、彼は夏帆の一種の兄妹なのではないかという可能性が浮かび上がってくる。血縁関係があるとまで言いたい訳ではないが、それでも何らかのかたちで、二人は兄妹なのではないか。

『街とその不確かな壁』で「イエロー・サブマリンの少年」を登場させて仮想的な父子関係を描いていた村上春樹ならば、ここから仮想的な兄妹関係の領域へ踏み込んでゆくのではないか、という予想もあながち怪しげなものには見えないはずだ。どうだろうか？

とまあ、思いつく限りの手札を広げてみたから、あとは、村上春樹が手札を開けるのを待つだけ。もちろん、見当違いの可能性もあるだろうが、そうだとするとそれはまた後日の話——。(コーク)

編集後記

今年度から編集委員に加えてもらいました、猫足と申します。猫足……アンティークの家具によくあるアレをイメージしていただいたらよいでしょうか……あるいは、あの、バスタブとかの。猫足のついた家具が、本を読み、書評を書く……なんだかモーパッサンの小説みたいですね。……ところで、なんでバスタブに猫足をつけるんでしょうね。むずかしいことはよくわかりません、家具なので。

こうしてこの場を借りて独り語りをしていると、まるで夢野久作の語り手になったような気分です……エエ、そう云うものなのかもしれません……しかし、果して私はイッタイ誰に話しかけているのでしょうか……抑も斯うして語る私は何者なのでしょう、ホホホホホホ……イヤ、失敬、失敬……たまにはこんなデイレタントな遊戯をして愉しむというのも、ナカナカ良いものかもしれませんネ……イヤハヤ実にケッタイなこと……

とまれ、冗談は程々にしておきつつ、徐々に蒸し暑くなってくる頃合いだと思いますが、みなさまご無理のなさりませぬように。斯くいう猫足、さぼりすぎて授業何を取っていたかも覚えていません。まあ、そんなこともありますよね。だって本読んでた方が楽しいし。

開き直りつつ記す (猫足)

当てよう！ 図書カード

今回の特集でも取り上げられている、愛媛は松山。そんな松山が誇る松山城は、江戸時代以前に建築された天守が残っている現存12天守に数えられています。さて、次の4つのうち、現存12天守でない城はどれでしょう？

1. 金沢城
2. 宇和島城
3. 姫路城
4. 弘前城

(荒砥)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは7月15日です。



《3月号の解答》 3月号の問題の正解は、1.の蟬丸でした。正体不明の琵琶法師にして歌人とはミステリアスですね。逢坂の関があった山科から大津へ抜けたところには、蟬丸神社というものがあるそうです。図書カードの当選者は、たんこさん、もちべんさん、ぷよーどるさん、白木さん、ハリーさんの5名です。当選おめでとうございます。(浅煎り)

読者がらひつじ

○特集「音楽」とでも楽しく読みました。全体的に考えさせられたり自分に変化が生まれそうな本の紹介が多く、書評以外も一冊丸ごと堪能しました。年度末の忙しさを越えたらゴールデンウィークあたりに集中して読みたいと思います。今年もインフルエンザなど色々と流行しましたが、皆様もお元気で多様な本をご紹介下さい。いつもありがとうございます！

(防災研・ラナンキユラス)

——温かいお言葉をありがとうございます。私もGWに積読本をまとめて片付けるつもりだったのですが、不思議なことにGW明けには積読の山は高くなりました(勝手に増殖しているのではないかと疑っています)。

○学生時代にあまり本を読んでいなかったのが後悔している還暦の者です。今回の大学的読書事始めを参考に若者の気分で読書してみたいと思いました。(卒業生・もちべん)

——学びの道は誰にでも開かれていて、本はその扉なのかもしれません。そのお供に綴葉を選んでいたとき、ありがとうございます。

ちなみに現在、吉田南図書館では綴葉の「大学的読書事始め2025」とコラボした展示が開催中です。ぜひお立ち寄りを。(浅煎り)